

方正とランプーン、二つの慰霊塔に思うこと

～「嗚呼 満蒙開拓団」と「花と兵隊」～

森 一彦

映画「嗚呼 満蒙開拓団」の冒頭シーンは、中国残留孤児裁判の判決の日から始まる。この映画を手がけた羽田澄子監督は、この物語が“過去の証言”ではなく、現在進行形の問題であることを告げている。満蒙開拓団の人々は、かつて1945年8月のソ連軍の侵攻とともに、関東軍に棄てられた。そして、息絶えた人々も、中国人によって育てられ生き抜いた人々も、戦後は日本から見棄てられつづけた。そして、ようやく祖国への帰国を果たした人々も、言葉も通じない日本の社会から棄てられつづけたのだ。この物語は、二次被害、三次被害の記録であるとも言える。この人たちと、日本社会との間に横たわりつづけた断絶とは、一体何だったのだろうか？中国残留孤児の調査が開始された当初、報道される方々の顔写真に、私たち日本人は少なからず衝撃を受けた。そこには“戦後も終わった”筈であった戦争の傷跡が鮮明に残り、それまで見えなかったものが確かに存在していたのだ。見えなかった者たちが、歴史の裏側から登場したのだ。その姿は、戦争という歴史の責任を一身に背負いつづけて生きてきた人々のようにも見えた。だが、であるからこそと言うべきか、多くの日本人の反応は冷たかった。

映画に登場する方正地区日本人公墓は、残留婦人の松田ちゑさんが畑の開墾をしている時に沢山の日本人の遺骨を見つけ、地元政府にお墓の建立を願い出たことがきっかけで造られたという。文化大革命の時代には、日本人公墓造りに尽力したという理由により松田さんは3年半も投獄され、死刑にもなりかけた。1963年に建立されたこの日本人公墓は、地元政府によって現在まで維持されつづけている。

「嗚呼 満蒙開拓団」を見終わった後も心に残りつづけたのは、中国の養父のひとり魯万富さんの言葉だ。「かわいそうで家に連れて帰って育てたよ」「かわいそうで」「かわいそうで」——侵略者の子供であろうと、どこの国の子供であろうと、関係はない。ただ、かわいそうだったから、という言葉に胸を衝かれる。この撮影の二ヶ月後に、魯万富さんは亡くなられた。戦争は人と人との間に断絶を作る。しかし、この魯万富さんの生き様に、私たちは救われる。戦争が生み出した断絶が、断絶を乗り越える可能性を生み出していることを、方正公墓の存在は教えてくれている。

そして、タイ チェンマイの南約70km ランプーン県の一隅にも、日本人が知らなかった日本人死没者の為の慰霊塔がある。「嗚呼 満蒙開拓団」に引き続いて昨年公開された映画「花と兵隊」は、ビルマ戦線から祖国に戻らなかった未帰還兵の現在を描いたドキュメンタリーだ。片や100本近い作品を撮っている大ベテランの羽田澄子監督、こちらは半世紀以上年下の松林要樹監督のデビュー作。アプローチは異なるが、どちらも記録映画の存在意義を十二分に感じさせてくれる。

「花と兵隊」に登場する何名かの未帰還兵のなかでも、最も強烈な印象を与えるのが藤田松

吉さんだ。戦後、日本に一時帰国した藤田さんは、実兄から「目的は何だ？金か？」と言われ母親の墓前で一晩泣き明かす。その後、帰国の為に貯めておいた資金を使って、日本兵の白骨約800柱を一人で拾い集め、自宅近くに慰霊塔を建立する。この映画に登場する未帰還兵たちも、日本社会と断絶しつづけた人々だった。野晒しとなっていた日本兵の遺骨を収集したのは、日本社会から棄てられつづけた藤田松吉さんだった。白骨も藤田さんも、祖国から見棄てられた者同士である。

未帰還兵の坂井勇さんと中野弥一郎さんの会話は、日本語ではなくビルマ語で交わされる。二人はパオ族の姉妹と結婚したが、この姉妹の存在感が際立っている。子供や孫や助けた難民たちに囲まれて生きる二人の生活は、とても幸せそうだ。断絶された側の彼らと、断絶した側の日本社会。果たして人間らしく生き、幸福だったのは、どちらだったのか。日本は今、12年連続で年間3万人以上が自殺する社会である。映画のラストシーン、撮影の途中90歳で亡くなった坂井勇さんのいないひっそりとした自宅で、ハンモックに横たわる老妻マ・ミヤイは、坂井さんと共に過ごした時間をいとおしむかのように、お腹の上に抱いた「サクラ」という名のひ孫を優しくあやしていた。

日本社会から断絶された人々が、日本人の屍の為に建てた二つの慰霊塔。慰霊塔は生者が死者の為に建てるものではなく、死者が生者の為に建てさせるものではないだろうか。死者の声に、私たちが耳を傾けるようにと。その存在と業を慰められているのは、きっと私たちに違いない。

参考：『ぼくと「未帰還兵」との2年8ヶ月——「花と兵隊」制作ノート』松林要樹著（同時代社）

（もり・かずひこ：1958年群馬県生まれ。93年から百貨店駐在員として北京に3年半在住。現在、広告会社勤務。趣味はカラオケ、ヨガ。最近、加藤真規子著「精神障害者のある人々の自立生活—当事者ソーシャルワーカーの可能性」（現代書館）にハマっている。方正友好交流の会ボランティアスタッフ）